



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2019年12月8日発行 第50号
事務局長 水原 渉
TEL/FAX 0749-47-5169 (共通)
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【シリーズ:JSAとわたしー第2回】

「原発事故と甲状腺がん」

ぜぜ診療所 東 晶子



福島原発事故後の放射線被ばく、現在なおつづく低線量被ばくという健康問題に対して、私は滋賀県内避難者の会や保養目的で東日本から滋賀にやってくる方々を対象に、放射線被ばくによる健康障害、甲状腺がんの健診を2012年より毎年夏に実施している。福島医大が実施している福島県民健康調査とは別であくまで自主的な取り組みであり、福島県で被災した人に限定していない。カンパと職場の協力を得て避難者には無料で実施を続けている。

当初はこども健診29名から始めたが、2015年からは大人も対象に実施し96名となり、2018年初めて受診した母親に甲状腺がんが見つかり手術を受けた。2019年は43名の受診、これまでA2(甲状腺嚢胞)で経過を見ていたこどもに結節が新たに見つかり専門医に紹介した。

原発事故後福島県では震災時18歳以下と震災後1年以内に生まれた方、計38万人対象に甲状腺検査が実施され、現在4巡目の検査が行われている。調査結果報告は公開され、私も注視している。福島県民健康調査甲状腺検査評価委員会の報告書では、1巡目、2巡目検査でわが国のがん登録で把握されている罹患統計の数十倍高い甲状腺がん発見率であることを認めながら、結論は「発見された甲状腺がんは放射線被ばくとの関連は認められない」。年々受診率が低下していること、県民調査とは別の機会に甲状腺がんが発見される事例も増えてくるという可能性を指摘しながらも、福島医大以外での手術事例は統計に入れてい

ない。世界で他にない貴重な甲状腺検査の統計的信頼性を損なうことになりかねない。

疫学的事実を追求するという科学的視点を、科学者が貫き通せるかが問われていると感じる。

【活動報告】2019年度個人会員分会野外活動

「醒井養鱒場見学と霊仙山の現状を視る」

個人会員分会は、10月27日(日)表題のように野外研修を行った。近年、米原市上丹生にある霊仙山(りょうぜんやま)の“鹿の食害”、下流水の白濁、水質への影響が問題となっている。今回の研修では、養鱒場専門員や現地の方々による説明や見学を通して現状の理解と問題の認識を深めた。

◆ 滋賀県醒井養鱒場

当施設は、琵琶湖の固有種ビワマス(ヒワマス)の増殖を目的に、1878年、宗谷川の醒井峡谷に自然水路を利用して設立され以後、今日まで継続してきた日本最古の養鱒場である。現在事業は、滋賀県から滋賀県漁業組合連合会に委託され、ビワマス、ニジマス、アマゴ、イワナ養鱒事業に取り組み、約135万匹を飼育中と言われる。

県職員である三枝仁専門員から、説明を伺った。霊仙山鍾乳洞からの湧水(水温12.3℃)を水源とする宗谷川、その天然の川をそのまま生かしたマス類の生産、普及と研修、調査研究を目的とする施設である。

1993年、継代飼育されたものを用いて22カ月齢で最大で全長46.8cm、体重1658gのビワマスの作出に成功。2009年より、県内養殖業者に稚魚を出荷しビワマスの養殖事業化に向けた本格的な取り組みがされている。その後、全雌三倍体の研究に取り組み、2012年、水産庁から出荷可能確認通知を受け、2012年より県内養殖業者への種苗出荷が始まり、ビワマス養殖業の経営規模拡大への道を切り開いた。

養鱒場の水質にかかわって懸念される点は、生命線である宗谷川の水質の問題である。一つは、19ヘクタ

ールの養鱒場を取り囲む山林の多くが県有林で、その手入れが全くできていない点である。二つめは、霊仙山の“鹿の食害”による荒廃化が、宗谷川の白濁、茶濁を招いている点である。当然ではあるが、醒井養鱒場もまた霊仙山の自然生態系のありように大きくかかわっているのであり、これらのことが、改めて底深い、持続的な環境づくりの重要性を私たちに強く訴えているのだと感じた。



◆ 霊仙山の“鹿の食害”の実態

霊仙山に降った雨は、丹生川と宗谷川に流れるが、2つの川の合流するところに上丹生集落がある。銚金具師（かざりかなぐし）の中村幸雄さんと、元市職員の水清克章さんから、“鹿の食害”で荒廃する霊仙山の実態のみならず、広く霊仙山の自然生態系について、多くの写真に基づいてお話を伺った。

霊仙山、標高 1094m (琵琶湖国定公園の特別地区)。今、その霊仙山の頂上は、“鹿の食害”で植物（クマザサ、イタヤカエデ等）が枯れはて、裸地がむき出しになっている。その結果、表土の流亡が起こり、所々に石灰岩が溶け落ちてできた空洞が生じている。法令により雌鹿の捕獲が禁止されて以後鹿が増え続け、最高時には頂上に 100 頭ほどの姿が確認できた。その後、頭数が増え、食べ物不足により（2013-14 年頃）、現在はピーク時に比べれば頭数は減っているが、食害は続いている。今後、表土の流亡、倒木、それらの河川への堆積が進み、雨量次第では、容易に洪水が発生するリスクが高まっている。しかし、鹿食害の現状、伴って生じている生態系の変化の正確な実態把握、因果関係の科学的な解明がなされていないというのが実態である。行政の責任は重大である。

（個人会員分会長 小池恒男）

【活動報告】 2019 年度滋賀県立大学分会

「緊急学習会 大学入試改革、何が問題なのか」

2019 年 10 月 23 日（水）、滋賀県立大学分会主催で「緊急学習会 大学入試改革、何が問題なのか」を学内で開催しました。学内全教員に呼びかけ、12 名（うち非会員 6 名）の参加を得ました。英語民間試験利用、共通テストにおける記述式問題の採点、調査書等による「主体性」評価について、それぞれ非会員を含む話

題提供者を依頼し、所属学部の異なる参加者同士の意見交換をしました。開催日は萩生田文部科学大臣の「身の丈」発言の前日、英語民間試験問題はマスコミで連日取り上げられてはいたものの、実施が強行されるのではとの見方が強かった時期です。また大学共通テストの国語の記述式問題に関しては今ほど話題になっていませんでした。「主体性」評価については現在もその問題が殆ど知られていません。

2021 年度入試に係る滋賀県立大学の方針は、2018 年 7 月と 2019 年 3 月に予告として公表されています。すなわち、①英語民間試験については出願資格として利用（A1 を出願資格として求める）、②大学共通テストの国語・数学の記述式問題は利用（ただし配点等は未公表）、③一般選抜試験においても多面的・総合的な選抜をする（いわゆる「主体性」評価を行う）の 3 点です。国立大学および国大協は 11 月 29 日までに英語民間試験の利用方針の変更を全て公表しましたが、この原稿を執筆している 12 月 3 日時点で、滋賀県立大学は①～③全てについて変更の告知をしていません。公大協も同様です。

入試に関する内容であるため、緊急学習会での議論の詳細についてはご紹介できませんが、この学習会を JSA 県大分会として主催したのは、この問題の根底に科学的知見に立脚して物事を進めるという基本的な姿勢の欠如があり、科学者の社会的責任を重視する日本科学者会議として看過できないと考えたからです。また、いうまでもなく大学人としての良識と社会的な説明責任を問われる問題でもあります。

10 月 24 日の「身の丈」発言以後、英語民間試験については事態が急展開しましたが、延期されただけであって問題は解決していません。本来であればもっと早期に問題が公論化すべきでしたし、いくら国が民間業者と結託しておかしな入試改革を行おうとしても、各大学がそれに付度せず良識に基づいて責任ある判断を示していれば、事態の深刻化は防げたはず。その点で、滋賀県立大学も他大学と同様に反省すべき点が多くあります。受験生や社会に対して責任ある対応を示せるよう、学内での議論の活性化に JSA 県大分会も役割を果たしていきたいと思えます。

（滋賀県立大学分会 河かおる）